

Chap.12 改造・増築された町家

§ 12.1. 改造・増築の内容

本章では、伝統町家に増築・改造などをほどこした住宅を取りあげる。伝統的な住宅について、現代の人々がどのような点を問題としているかを明らかにするためである。なお、住宅内での間仕切りなどに関しては、後から改造されたものか否かは明らかでないものがあるが、ここでは明らかに他の住宅とは異なっていて、改造と認められるもののみを扱う。まず、増改築の内容をリストアップし、前章の建築タイプとクロスしてみた（下表）。次節以降ではそれらの代表例を見ていこう。

[1+0 型] (含 1*+0 型)

- ・ 下屋などによる平面的な拡大 Tran Phu 83, 41, 107
- ・ 中 2 階を設ける Tran Phu 155/157, 51
- ・ 前家の後ろに 2 階建てを追加（子棟の 2 階化） Tran Phu 81, 55, 135
- ・ 前家の柱撤去 Tran Phu 81, 55

[1+1 型]

- ・ マルチ・ファミリー化→前家に通路 Tran Phu 67

[2+0 型]

- ・ 庭に 2 階のテラスを兼ねた屋根を設ける Tran Phu 119
- ・ 前家を拡大する Tran Phu 88

[2+2 型]

- ・ 平面的な拡大 Tran Phu 37
- ・ 台所の中庭への移動 Tran Phu 23
- ・ 正面の柱の撤去（庇の室内化）、シャッター化 Tran Phu 99

Fig. 12.1: 平面的に拡大する (1)
(Tran Phu 83)

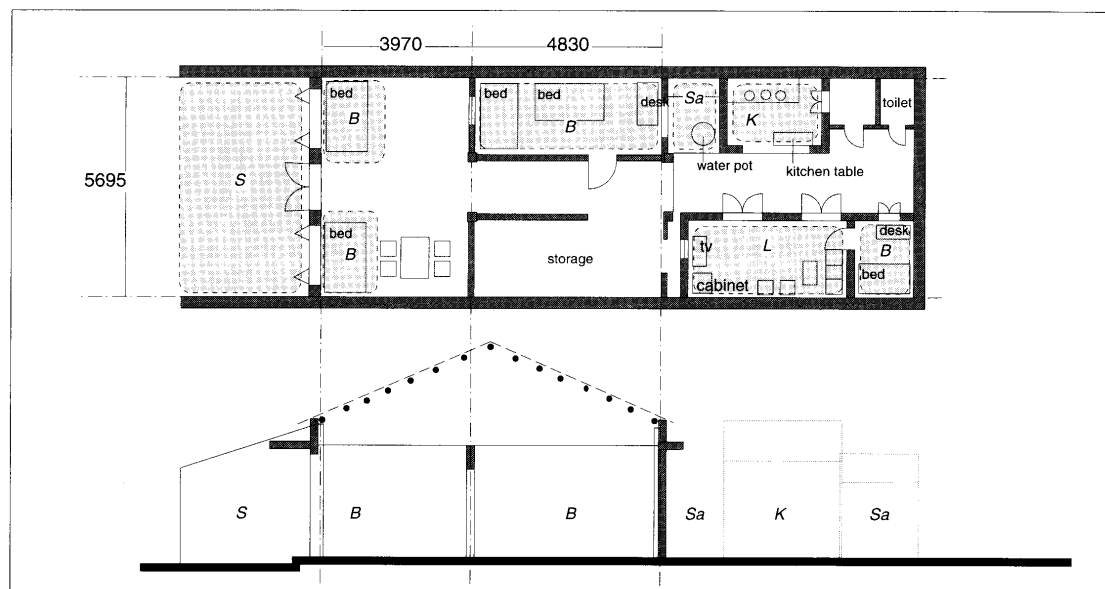


Fig. 12.2: 平面的に拡大する (2)
(Tran Phu 41)

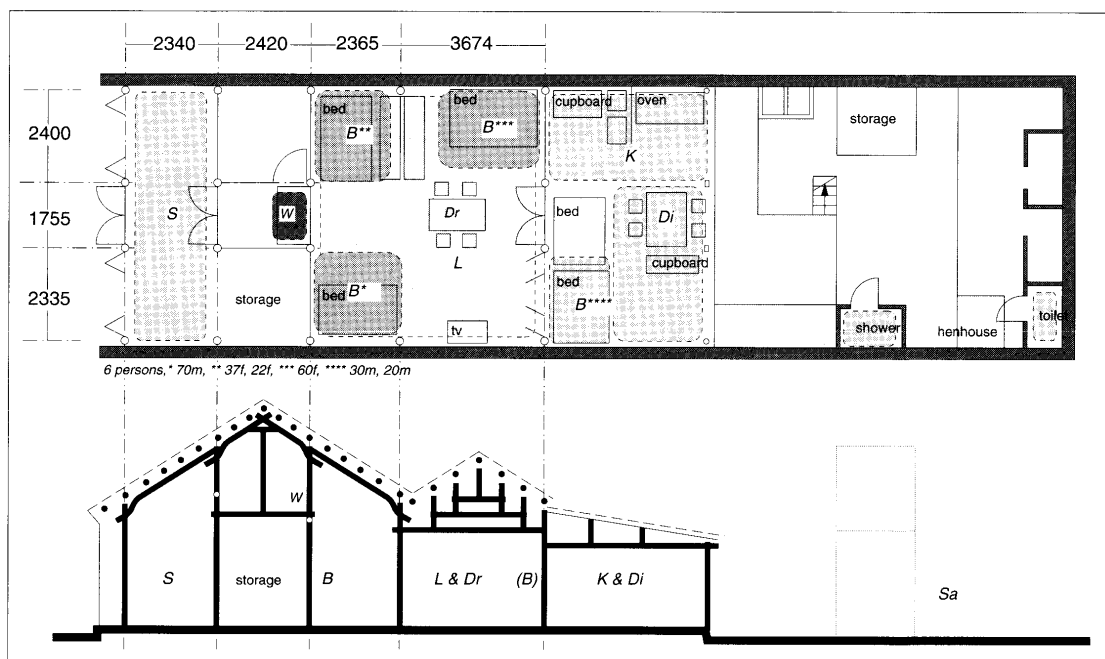
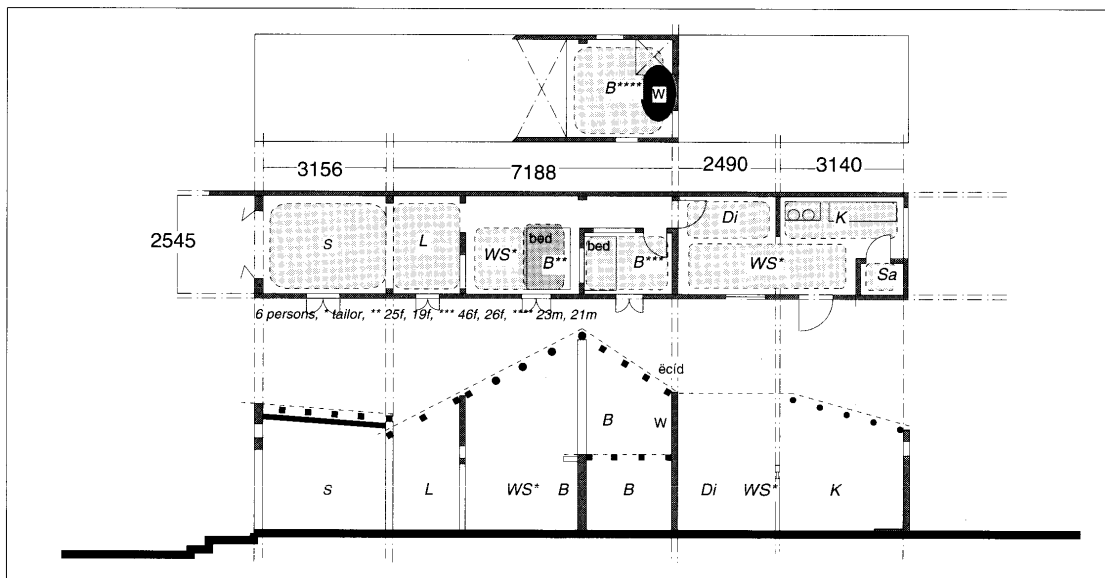


Fig. 12.3: 平面的に拡大する (3)
(Tran Phu107)



§ 12.2. 1 階建ての増改築

まず、1 階建ての建物から見よう。a～cが[1+0型]（子棟付きを含む）、dが[1+1型]である。

12.2.a. 平面的に拡大する [1+0型]

まず、母屋そのものを平面的に拡大するタイプの増改築が多く見られた。増築の仕方はさまざまである。以下は、具体例で見ていこう。

• Tran Phu 83（家族数9人）

3世代9人の家族が住む。建物は現在の街路から約4メートル後退しており、そこへ下屋をつけて店舗としている。拡張した下屋には簡易の木造壁、扉がとりつけられており、庇の下は完全に室内化されている。本来の建物は全て生活空間にあてられている。

家族構成は、89歳の女性を筆頭に、その子供が3人（57歳女、52歳男、24歳女）、そのうち52歳男には50歳の妻と子供4人（22歳女、20歳女、17歳男、13歳女）がある。9人という家族数はこの型の住宅の平均居住者数6人の1.5倍である。また構成員の多くは成人であり、生活空間のために多くの面積が必要であることが容易に想定される。生活の場が拡大し店を営む場を通り側に押し出した格好である。また、庭には橋家に相当する棟が増築されている。

• Tran Phu 41（家族数6人）

子棟つきであるが、中庭側へさらに下屋を出して増築されている。もともとは、2階建ての後3家があったのだが、老朽化のため1965年に取り壊された。家族は、夫婦（72歳男、60歳女）と子供4人（37歳女、30歳男、22歳女、20歳男）の計6人。このように子供は全部成人している。他に38才の長男と36才の次男がいるが、彼らは他の仕事場で生活している。

前家の第1および第2スパンが店舗に使用され、第3スパン、子棟および増築部分が生活空間となっている。このうち、子棟および増築部分の中心がそれぞれ居間と台所兼食事室に使われ、さらに各棟の入り隅にベッドが配置されている。ベッドは4台だが、ふたつを夫婦がそれぞれ使い、ひとつをふたりの男の兄弟が、残りのひとつを女の姉妹が使っている。やはり、住宅の面積は窮屈で、そのことが増築につながったことは間違いない。ただしこの家では、後3家を再建することも敷地規模上からは可能であった。それをせず、前家を増築することで生活の場をコンパクトにまとめている。それが、住空間への要求に基づくものであるのか、成りゆきの結果なのかは不明である（資金的理由など後者の公算が強い）。いずれにせよ、外気に面さない部屋を作るこのような改造は住環境上から望ましいとは言えないだろう。

• Tran Phu 107（家族数6人）

この敷地は間口は2.5mでチャンフー通りの平均6mよりもかなり狭い。調査した住宅の中でも最も狭い。もとの建物は、中央の中2階をもつ棟である。その前後に、敷地一杯に増築がなされている。ヒアリングによれば、1975年の購入後、1987、91、94年と、8年間で3回の改造が行なわれたということだ。家族は、46歳の母を先頭にほぼ成人した子供が5人（26歳女、25歳女、23歳男、21歳男、19歳女）である。

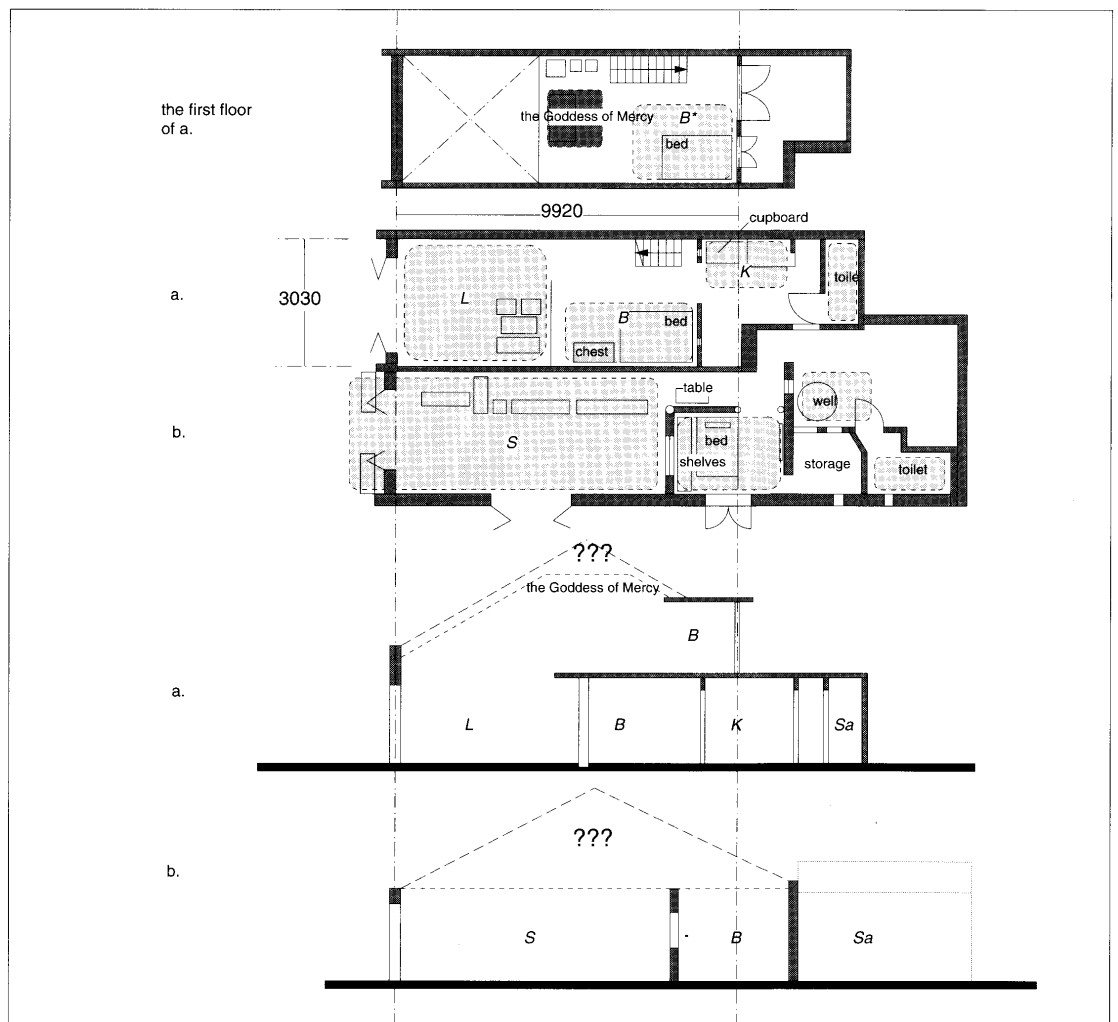


Fig. 12.4: 中2階を設ける (2)
(Tran Phu 155/157)

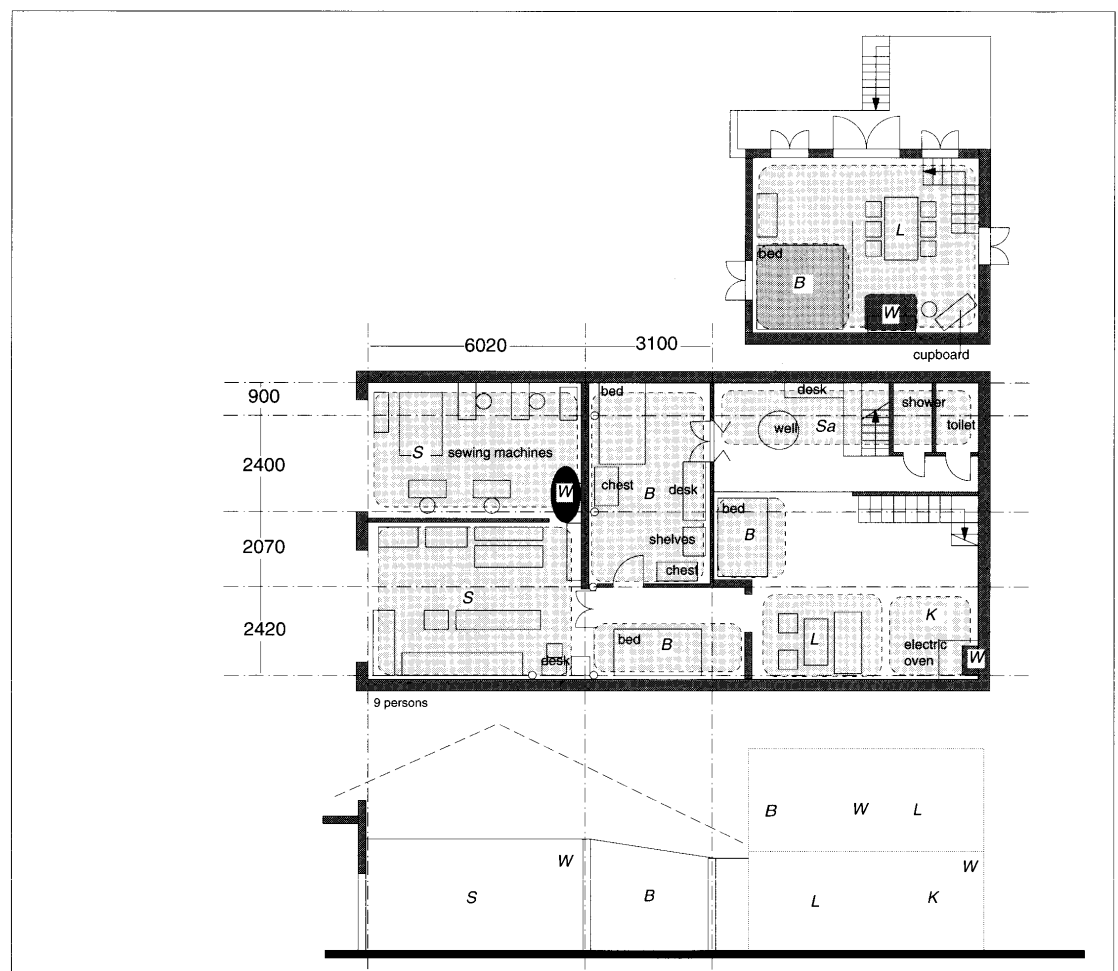


Fig. 12.6: 2階建て追加／柱撤去
(2) (Tran Phu 55)

12.2.b. 中 2 階を設ける [1+0 型]

続いてよく見られる例は、屋根裏を利用し、中 2 階を設けるものである。次にあげる 2 例は、中庭側の屋根の傾斜を緩くなるように改造して、2 階の部屋を増築している。

• Tran Phu 51 (家族数 5 人)

これも間口が狭く、奥行きも乏しいもと 1+0 型の住宅。家族 5 人で、夫婦 (夫 60 歳、妻 56 才)、長男夫婦 (夫 22 歳、妻 21 歳) とその子供 (1 歳)。現在は 1 階に長男夫婦の就寝の場と店 (理髪店) が、2 階に主人世帯の就寝の場と祖堂が配置されている。中 2 階の増設によって世帯間の就寝の分離が可能になった。

• Tran Phu 155 (家族数 3 人)

1+0 型の住宅。間口が狭く住宅面積も小さいために、もともと 1 階建てであった前家の庭側に中 2 階を設けて住宅面積を広げている例である。この建物はもともとは隣の 157 番と一体であったが、1976 年にふたつに分割された。157 番の断面が本来の形である。

家族は夫婦 (夫 40 歳、妻 38 歳) と子供 1 人 (7 歳)。改造前の住み方は不明だが、現在中 2 階は仏壇と主人の就寝の場として使われている。7 才の子供のこれからの成長に伴って、親子の就寝の分離を実現していくために中 2 階を増設したと想定される。さらに、中 2 階の床はテラスとして中庭に延長され、中庭全面を覆っている。これにより 1 階については通風・採光といった環境が失われた。なお、建物の前半分を吹き抜けにし、後ろ半分を 2 階建てにする形式は、現代住宅でよく使われている。

12.2.c. 前家に 2 階建てを追加／柱を撤去する [1+0 型]

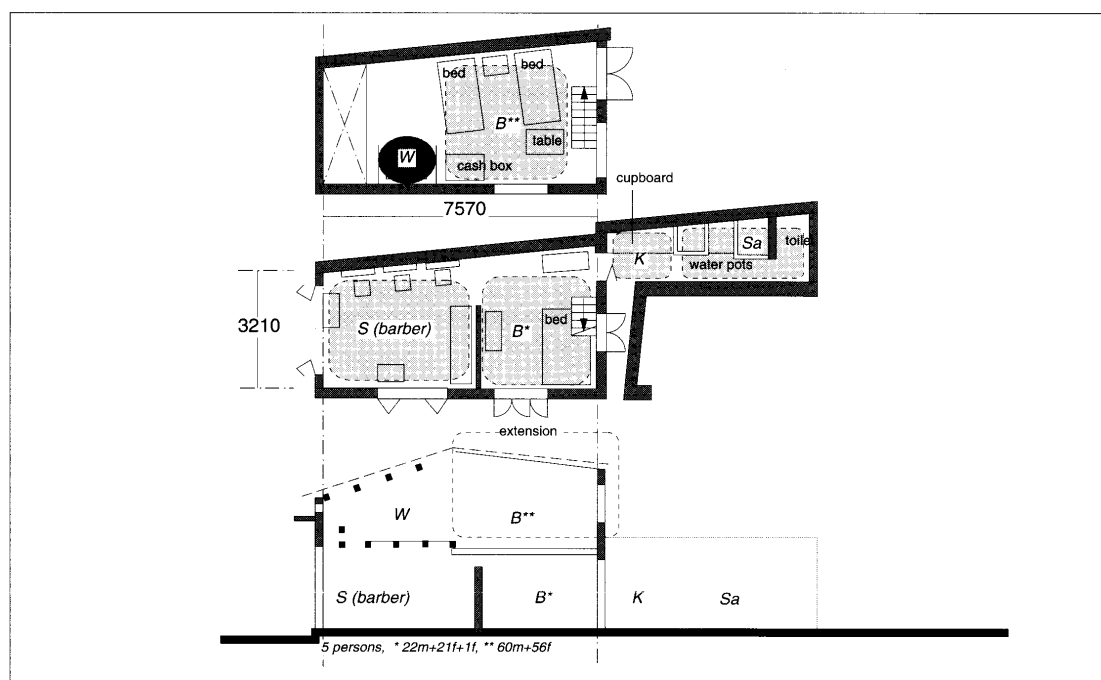
次は、前家に 2 階建てを追加する例である。主に敷地の狭さから、最初の平面的な拡大が 2 階建てによってなされている。

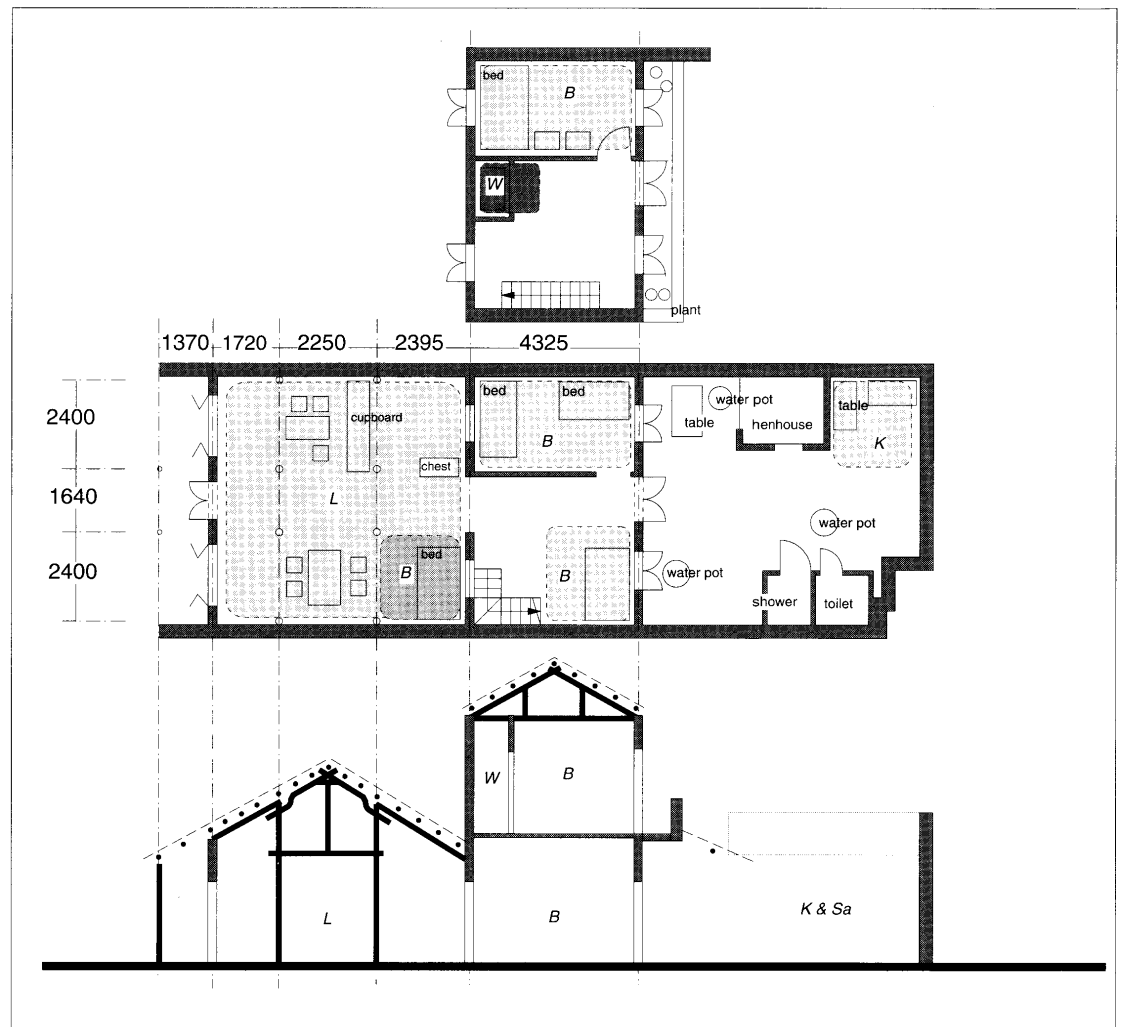
• Tran Phu 55 (家族数 11 人)

前家に接続した RC フラットルーフの 2 階建てを庭に増築している。2 階の床はテラスとして中庭に延長される。階段も屋内と屋外の 2 つがあるため、吹き抜けている中庭の面積はかなり狭い。

この建物には 11 人が生活している。この住宅型で 11 人というのは、調査した住宅の中で最も多い。増築部分の 2 階はある世帯の完全な個室として使用

Fig. 12.5: 中 2 階を設ける (1)
(Tran Phu 51)





されている。ほかの人たちは1階で生活しているが、量としての生活の場は得られているが、中庭の面積が少なくなったことで、住環境の質はかなり悪化しているように見える。

• Tran Phu 135 (家族数 11 人)

1984 年の増築。2 階は現在は就寝空間と仏壇のために使われている。主人は前家の居間の中を就寝場としている。

• Tran Phu 81 (家族数 6 人)

子棟の位置に 2 階建ての棟を増築している。さらに上記の Tran Phu 155 と同様に、広いテラスを設け、庭のかなりの部分を覆っている。

家族は、夫婦（夫 38 歳、妻 38 歳）と子供 3 人（13 歳女、10 歳女、2 歳）、それに 76 才の妻の母の計 6 人。前家は通りからの 2 スパンを店舗とし、第 3 スパンを仕切って個室としている。この個室と子棟相当の 2 階建て、そして天井で覆われた中庭が生活空間を構成している。2 階建ての棟の 1 階は、部屋中央に皆が座るテーブル等を置き、隅にベッドを置くタイプ。ベッドに特に間仕切りはない。2 階は仏壇と老人の寝室となっている。

この建物は、さらに、通りから第 1 列と第 2 列の柱を貫の下で切断して、H 型の鉄骨の梁を渡すという興味深い改造がなされている。この結果、入り口は横開きのシャッターで全面的に開放され、店内の柱が取り除かれた。面積が拡大されるわけではないが、空間利用の自由度が増している。西洋様式の建物の多くが柱配置の自由度を増しているが、この改造もその流れの中に位置づけることができる。

12.4.d. マルチ・ファミリー [1+1 型]

後ろ家のある [1+1 型] では、ひとつの敷地に、血縁関係のない複数の家族が生活する場合の改造が見られた。

• Tran Phu 67

このチャンフー 67 番では、前家に 1 世帯 5 人、後 3 家に 2 世帯 4 人が住む。後 3 家の家族が、前家を通り抜けずに後 3 家に行けるよう袖壁にそって通路がとられている。間仕切りはレンガである。通り土間が前家の中央を貫通するホイアンの町家では、確かにプライバシーを保ちにくい。このような改造は、ホイアンの伝統的住宅の特徴であるファサードの対称性へも影響するので注意を要するといえよう。

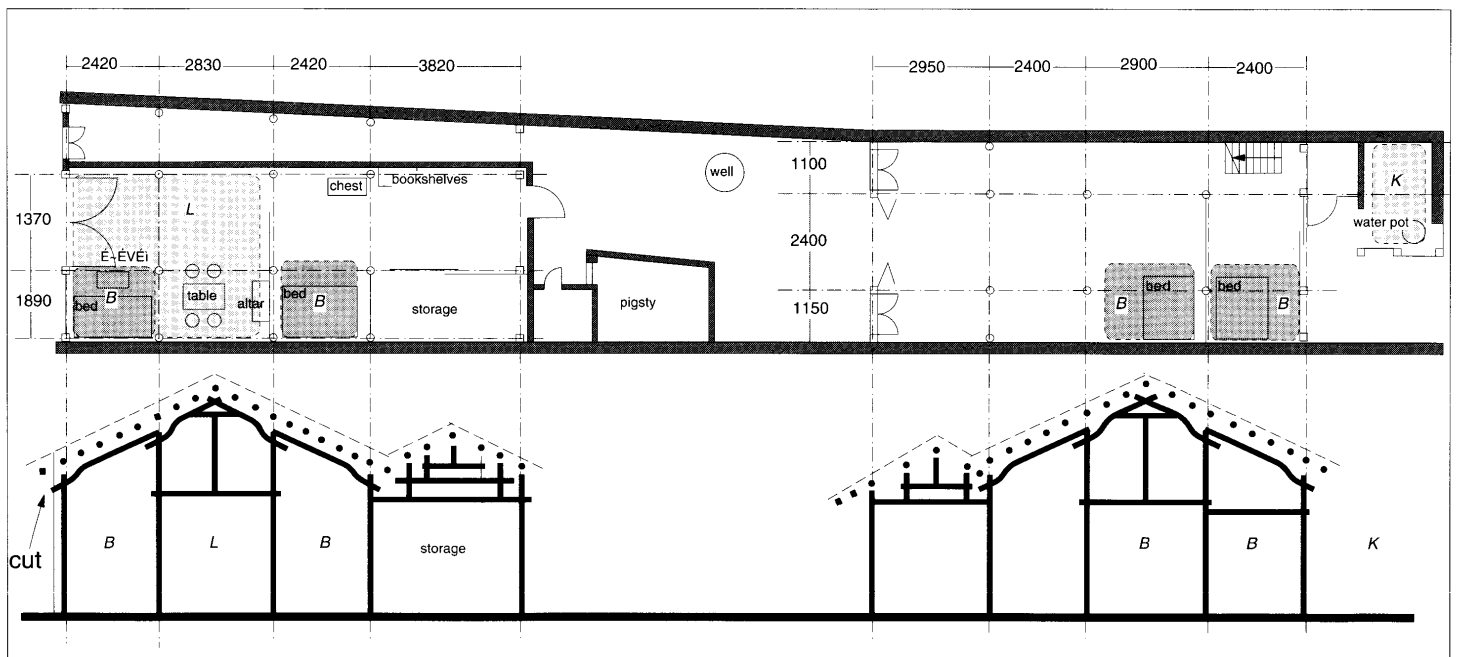


Fig. 12.9: マルチ・ファミリー (Tran Phu 67)

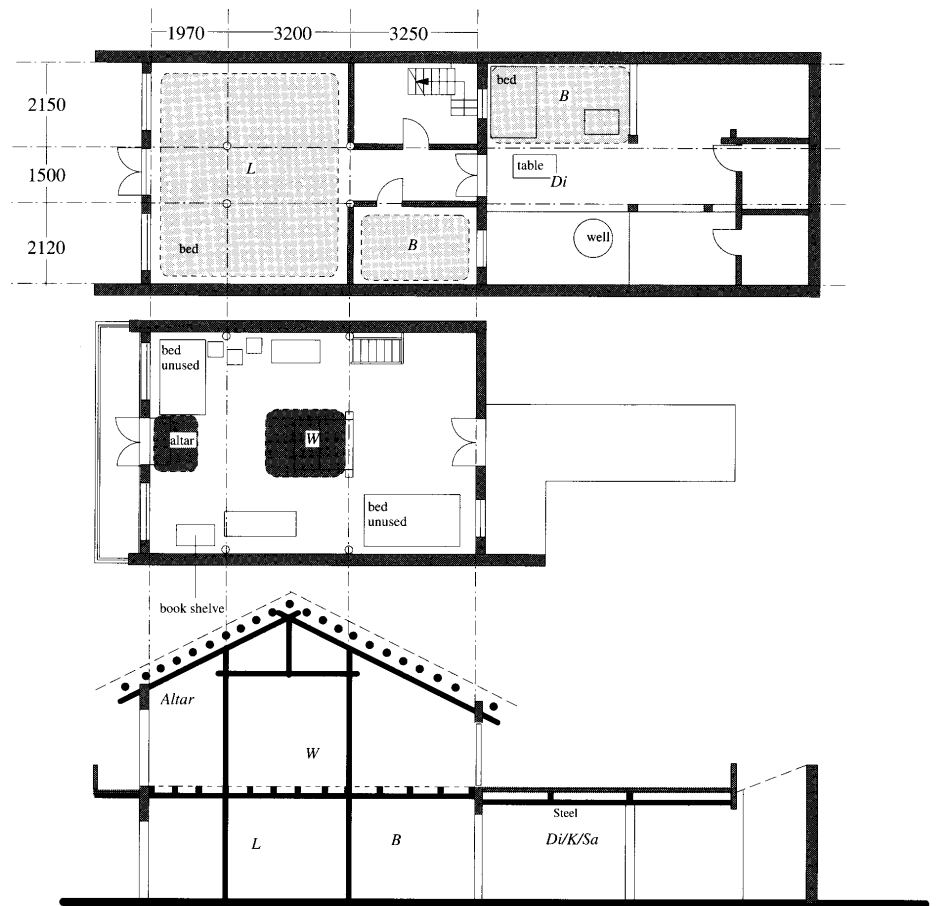


Fig. 12.10: 庭にテラス兼屋根
(Tran Phu 119)

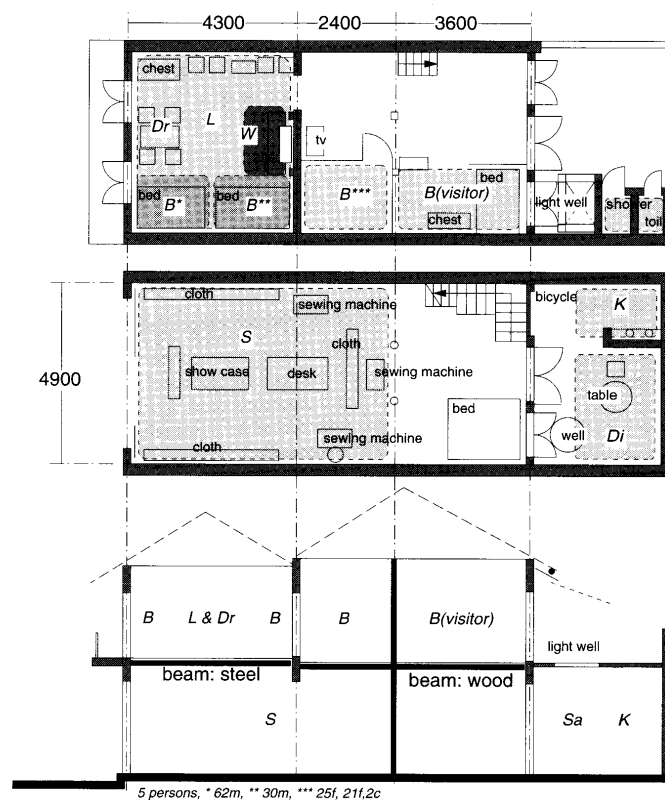


Fig. 12.11: 前家拡大
(Tran Phu 88)

§ 12.3. 2 階建ての増改築

12.3.a. 庭にテラスを兼ねた屋根を設ける [2+0 型]

• Tran Phu 119

2 階建ての前家みの住宅 (2+0 型)。2 階が居室として使われ、その庭側出入口から庭を覆う大きなテラスが出されている。現在の家族構成は親子2人 (72 歳母、35 歳男) であって、現状では、住宅規模に比べて居住者数が少なく、かつ店を営んでいるわけではないので、生活空間には余裕がある (2 階も使われていない)。改造はかつてより多くの人々が暮らしていたときの要求に基づくものであろう。テラスの上も下も現在はほとんど使われていない状態で、特に1階の住環境を悪くしているように見える。

12.3.b. 前家を拡大する [2+0 型]

• Tran Phu 88 (家族数 5 人)

この建物は原型が想像できない。2 階部分には2つの屋根がかかるが後ろの屋根の方に太い木の円柱が残っている。2 階床の梁は前の棟が鉄骨だが、後ろの棟は木梁である。だから全面的な建て替えではないと思われる。いずれにせよ、規模的には2+0型であったと言えるだろう。そして前家を拡大することで規模の拡大を図っている。そして庭の上には広いテラスが設けられている。

家族は3世代5人である。伝統的住宅が2階をあまり生活空間に使わないのに対し、この住宅では台所と食事室以外のほとんどの生活機能を2階にあげている。便所や水浴び場まで2階に設けられている。

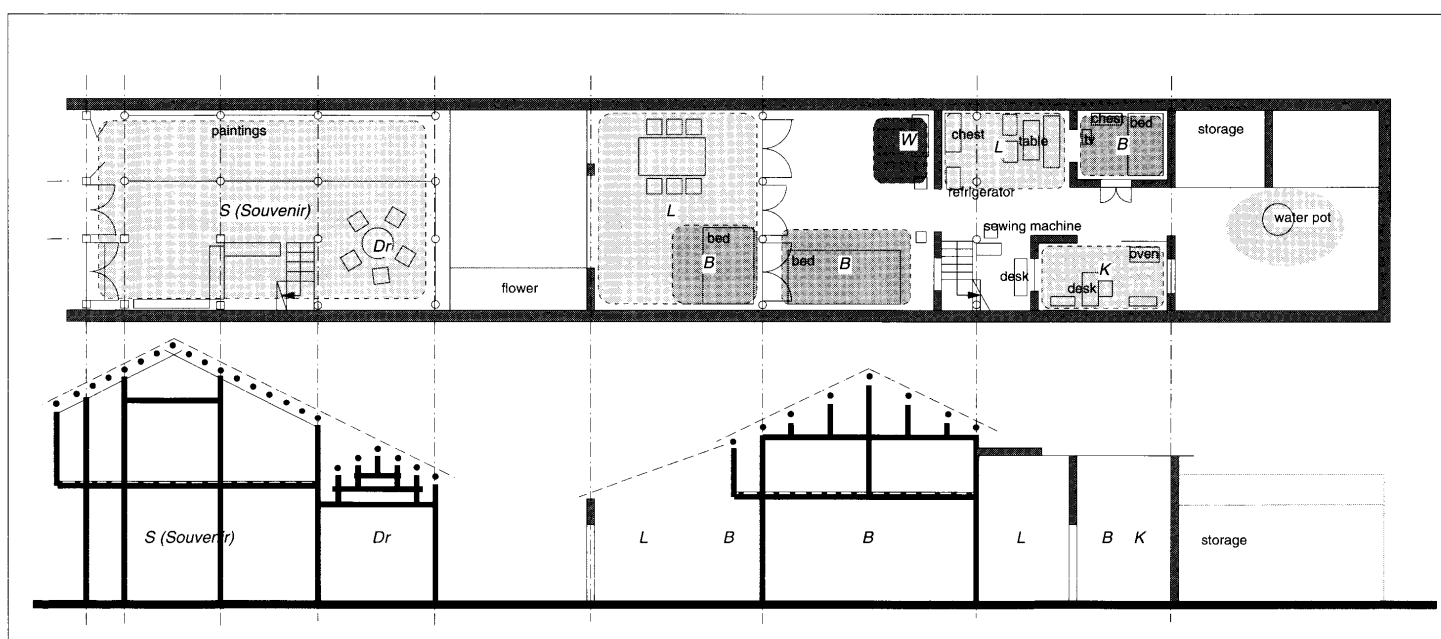


Fig. 12.12: 平面的に拡大 (Tran Phu 37)

12.3.c. 平面的に拡大する [2+2 型]

• Tran Phu 37

前家を全面的に店として使い、後ろ家を前後に拡大して生活空間としている。建物は前家も後ろ家も2階建ての2+2型なのだが、ともに2階は天井が低く、また後ろ家は傷んでいることもあって生活空間には適さない。家族は夫婦（夫39歳、妻33歳）に子供ひとり（6歳男）の計3人である。

12.3.d. 台所を中庭へ移動する [2+0 型]

• Tran Phu 23

伝統的には、後ろ家がある場合、台所は後ろ庭の背後の後ろ庭に設けられる。しかしこの住宅では橋家の1階を台所としている。さらに後ろ家の橋家近くに食事場を配置して橋家とつないで、ダイニングキッチンのような空間にしている。

家族は、夫婦（夫42歳、妻31歳）と子供3人（20歳女、15歳男、9歳女）の5人。建物は子棟付きの2階建て前家と2階建て後ろ家からなる2*+2型であるが、前家の2階は屋根が低く、後ろ家の2階は破損が激しく、居住空間としては使えない状態である。そのような窮屈な状態にも係わらず、橋屋に台所を設けているのは、その方が便利だからであろうか。たとえば、これなら店番と炊事を両立できる。中庭に台所を持ってくる改造は、核家族化の進展などと共に、今後の増大が予測される。

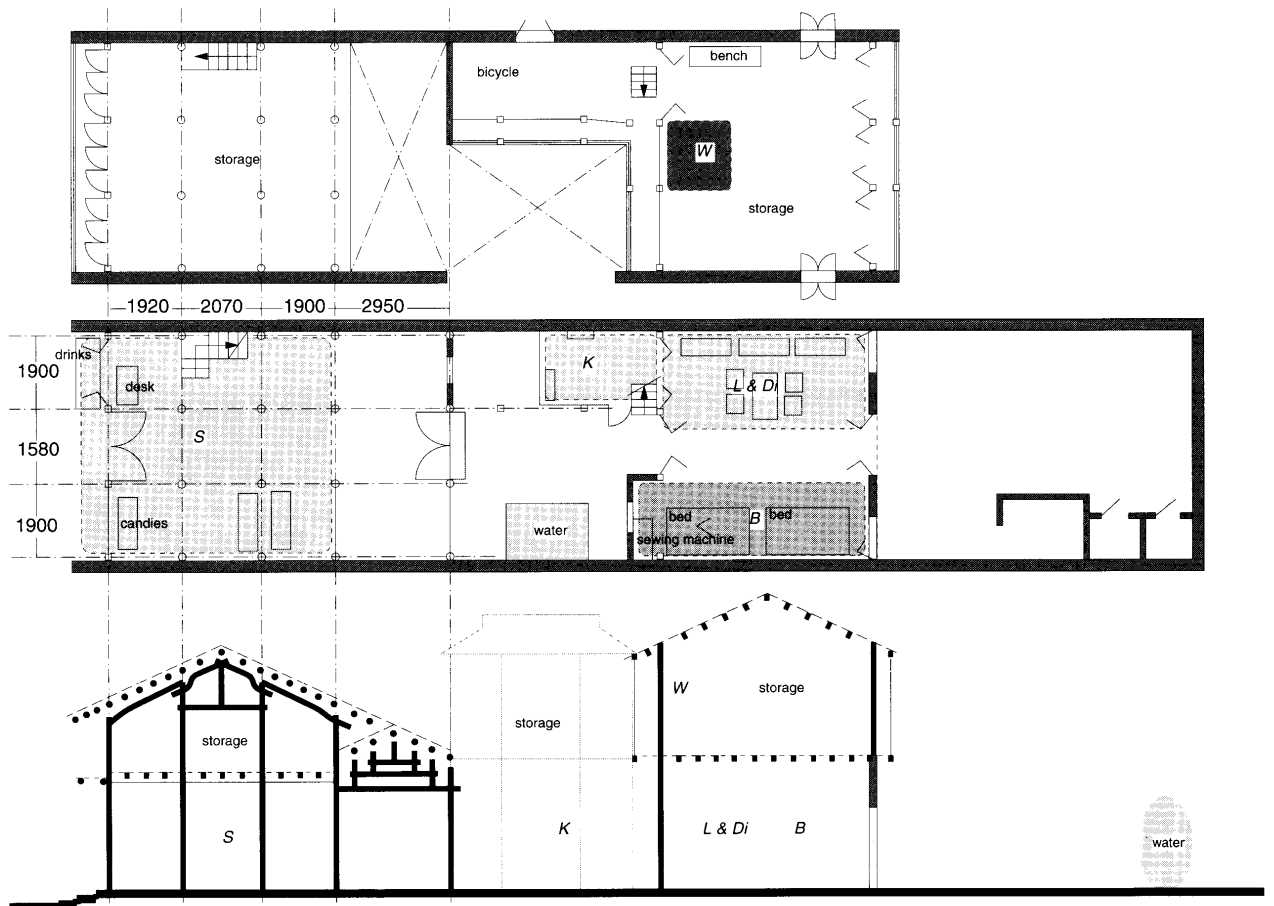


Fig. 12.13: 台所を中庭へ移動 (Tran Phu 23)

12.3.e. 正面の柱を撤去、シャッターへ

• Tran Phu 99

間口は狭いが、西洋風のファサードをもつ住宅（バルコニーはない）。前家の奥行きが大変大きく、中庭が小さい。雑貨店である1階の開口部が、間口一杯に開く横開きのシャッターに改造されている。もともとは3間からなる、中央は開き戸、両側は落とし板の伝統的な建具であった。

家族は5人。夫婦（夫58歳、妻56歳）と29才の長女とその子供（4歳）、そして25才の長男である。間口が狭いが奥行きがあり、かつ2階建てなので、生活空間にゆとりがあり、各世帯はそれぞれ独立した就寝空間を確保している。ただし店舗に関しては、1964年に上述のように改造された。このような店舗全面を開放するための改造は、すでになりに見受けられるし、今後も増加するであろう。

なお、この建物では台所は後ろ家の内部に設けられているが、それが可能なのは、この住宅では主に電気コンロを使用しているからである。ヒアリング調査からは台所を室内化したいという要望はあまりでてきていないが、電気やガスで調理できる台所製品が普及した場合、台所が次第に室内化されていくことを予想させる例である。

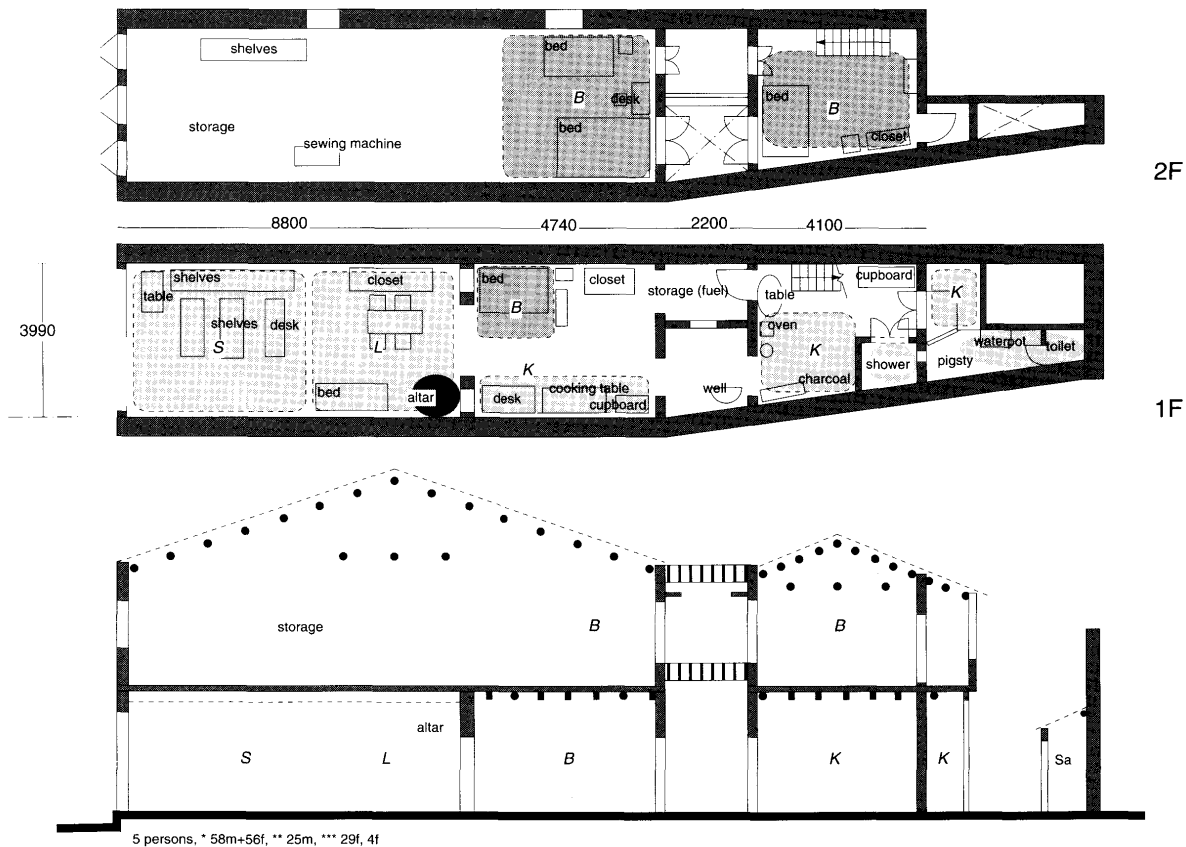


Fig. 12.14: 正面の柱を撤去、シャッターへ (Tran Phu 99)

§ 12.4. 改造・増築まとめ

伝統的な建物の増改築は、建物の制約から逃れようとする試みをよく表している。正面の改造や柱の撤去などの現象も見られるが、もっとも根本的な変化は、面積を確保するための増改築であろう。

多くの改造・増築が2階建ての建築に伴って行なわれている。特に前家だけの小さな敷地でこの傾向が著しい。すなわち、1階では環境を犠牲にしても面積を確保し、日当たり等は2階で享受するというパターンが広がりつつある。伝統的には2階は生活空間でなかったということを考えると、これはひとつの大きな変化である。伝統的な建築システムにおいても、規模を拡大するいくつかの手法を持っていたが、それを越えた面積拡大の要求が起こり始めているようである。経済の振興に伴い、商業が活発化すれば店舗を拡大する要求が強くなり、この傾向は一層明らかになるだろう。

以上は、既存の建物に規定されることなく理想通りの建物を建てるのが可能な改築においてもっと明確かつ直裁に見出されるであろう。そこで次の章では改築建物について検討を行なう。